

## プロジェクト研究

「ポストエスニック時代の文学におけるオムニフォンの意義」によるシンポジウム  
「日本文学における越境の諸相」報告

名古屋大学大学院人間文化研究科 土屋 勝彦

二〇一四年一〇月二五日（土曜日）一三時から一八時まで名古屋立大学滝子キャンパス一号館会議室にて上記シンポジウムが行われた。私たち科研グループは、これまで越境的な文学活動をしている作家や運動、思潮などをめぐって各国語圏を超えた横断的なシンポジウムを開催してきた。越境を何らかの境界を越えていく文学・文化現象ととらえ多言語性や複数文化、異言語をうちにはらむような作家・作品や、言語と視覚表象との境界を越えていくような作家ないし文学運動など広い意味での越境性につながる諸現象を、今回は日本文学を中心に共同討議した。発表者は名古屋大学文学研究科博士課程在学の魏晨氏、張ユリ氏、岡英里奈氏、ケンタツキー大学日本学教授のダグ・スレイメーカー

氏、そして招待講演者である立命館大学教授の西成彦氏である。そして国際日本文化研究センターの坪井秀人氏、西成彦氏、本学の田中敬子氏、土屋が司会を務めた。まず魏晨氏の「交錯するまなざし、齟齬する満洲夢——日滿綴方使節を中心に」の概要を述べる。日滿綴方使節は日本と「満洲国」の両方で児童使節がそれぞれ「満洲国」と日本を見物し、その見物の経験について綴方を書くイベントだった。本報告ではまず、日滿綴方使節の活動状況を整理し、その実態を解明した。そして、日滿綴方使節による綴方を収録する綴方集を取り上げて分析を行い、その分析を通して、日滿両側の児童が「満洲国」と日本に対する異なる捉え方と日滿の未来に関する想像力を読み取り、日滿間ならではの

文化的多層性を明らかにしていくものであった。とりわけ当時の日本ナショナリズム的言説の形成における差異と共通性が認められるという。張ユリ氏の「大衆に一九三〇年代を訴える——堀辰雄『風立ちぬ』の再生産と受容を中心に」では、出版当時から若者の間でブームを巻き起こした堀辰雄の小説『風立ちぬ』（一九三八）は、時代が変わるにつれて、歌や映像作品など、その媒体を変えながら再生産され、大衆に広く受容されてきた。本報告では、大衆に三〇年代を想起させる装置として小説『風立ちぬ』を捉え、その再生産と受容過程を時代別に分析することで、メディアに映し出された三〇年代と大衆との力学について考察しようとするものである。成田龍一が提示し

ている「体験／証言／記憶」の枠組みにおける戦争を小説『風立ちぬ』に置き換えてみると、五四年作は大衆が作品に対する共通した経験が持つていく上で作られた、原作に精通している映画であり、七六年作は作品を好んで読んだ人たちがどのような状況に置かれていたかについて、次世代に伝える映画であるといえる。そして、二〇一三年作は、現在のわれわれが『風立ちぬ』を如何に記憶しているのかについての映画だとする。岡英里奈氏の「一九四〇年前後における二つの岡倉天心像——戦時下の〈越境者〉・〈越境者〉イメージ」では、四〇年前後における島崎藤村と日本浪漫派による二つの岡倉天心像に注目し、両者がどのような思想的経過を辿って〈越境者〉天心を再発見したのかについて明らかにし、さらに両者における〈世界史〉認識に注意しながら、両者を比較する。それによって、当時の〈越境者〉や〈越境〉そのものに対するイメージが、「大東亜共栄圏」や「東亜の盟主」としての〈日本〉といった戦争肯定の言説と、いかに関わり合い、または反発し合うのかについて考察したものである。両者はともに、西洋思想の影響を受け西洋言語を獲得し

ながらも、「国粹」や「保守」の立場を維持した理想の「越境者」として天心を受容しているが、藤村は、西洋と東洋をつなぐ天心像として描いた可能性があるとする。スレイメーカー氏の「越境を越える、文学考察」では、「越境文学」における「越える」または「越す」というのは何をさすのかを考察したものであり、数名の芸術家の業績を考察しながら「越える」という動作を検討している。たとえば、藤田嗣治とか横光利一とか金子光晴などのフランス体験では、たとえ越境者の先駆者であったにせよ、日本人であるという国家アイデンティティが強く残り、二つの文化をまたがるという意識はなかった。外国に行つて日本語で書くだけでは真の越境にはならないだろう。越境の根本的な意味を掘り起こすためには、多和田葉子の小説を中心に扱つて考えてみるとよくわかる。多和田自身も登場人物も、異文化体験を行う自己自身を相対的にとらえ、確実なアイデンティティがなく、二つの文化の境界線上に生きていることから、以前のモダニズム作家・芸術家たちの異文化体験とは異なる位相であり、それは越境の真の姿といえるだろう。

西成彦氏の「比較植民地文学の試み―交叉的な読書について」では、若い頃に「複数言語使用地域の文学」という概念を考え、ポーランドの亡命作家ゴンブローヴィッチ研究を行い、カフカ研究を経て、東欧ユダヤ作家のイディッシュ文学研究のかたわら、比較文学者としてラフカディオ・ハーンや宮澤賢治にも取り組んだと述べられ、その後二〇〇〇年代以降、さまざまな科研共同研究の代表者として、語圏を跨いで移動しつづけた人々と、文学や芸術の関係を見きわめようというプロジェクトを推進し、現在は「比較植民地文学研究の基盤整備」という課題を掲げ科研の研究を続けており、その成果としてまもなく『バイリンガルな夢と憂鬱』という本を刊行する予定であるとのことである。最後に交差的な読書について、例えば、カミュの『異邦人』が植民地朝鮮の日本人によって書かれた可能性、あるいは中西伊之助の『楮土に芽ぐむもの』が植民地アリエリアのフランス人によって書かれた可能性を並行して考えることが、「植民地文学」をグローバル視野から読もうとする場合にきわめて有効であるといひ、これを「交叉的な読書」と呼

び、こうした研究の重要性を説いている。いくつもの「語圏」がせめぎあうなかで、世界全体が「複数言語使用地域」だと言ってみるしかないような現実が着々と進行しているのが「グローバル化」であり、「世界文学」とは「複数言語使用地域としての惑星文学」というふうな定義できるのではないかと指摘した。

以上、不十分ながら発表の概略を述べたが、その後の討論でも、欧米と日本の越境的、文学的な関わりをめぐって種々意見交換し、きわめて示唆に富むものとなった。発表者および関係者の皆様、そして参加者の皆様にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。なお、当日残念ながら都合で参加できなかった本科研メンバーは、沼野充義（東大）、今福龍太（東京外大）、管啓次郎（明大）の諸氏であることを付記する。

